

## 2008年度卒業論文紹介

### 1. 馬場 裕介

#### ドイツのマイスター制度と職人遍歴

筆者は、高校を卒業と同時にドイツへ渡ったのだが、ドイツ滞在中におやっと目に付く格好をしたドイツ人を幾度か見かけたことがあった。黒づくめの服に黒の帽子と全身を黒で覆いつくし、片手には木の棒を持ち、その姿はだれもが目を留めてしまうくらいの奇妙な格好だった。その当時は、どこか仮装パーティに行くものとはばかり気にも留めなかったが、日本に帰ってきてからドイツで見たあの格好をした若者の記事を偶然に見つけた。記事を読み進めていくと、その人たちはマイスターになるために修行をしているドイツ人の若者だった。その若者の旅は一体どんなものだろうかと興味を持ち、調べていくうちにそれがドイツのマイスター制度の中に組み込まれたものだということが分かった。こういう経緯もあって、卒論のテーマに「ドイツのマイスター制度と職人遍歴」を選んだ。

ドイツと聞けばベンツ、フォルクスワーゲン、BMWといった自動車や切れ味の鋭いゾーリングンの刃物などを思い浮かべる。これらのドイツ製品の技術や技能は決して一朝一夕に形成されるわけではなく長い年月を要する。起源をさかのぼってみると中世以来から引き継がれてきた「マイスター制度」に始まりがあることがわかった。

本稿は五つの章の構成で成り立っている。第一章ではマイスター制度とは何かから始まり、歴史的観点からマイスターの起源があると考えられる12～13世紀の中世都市と手工業者の関係、また手工業者が所属していたツunftについて、法律面からはマイスター制度の成立や現在に至るまでの流れについて述べる。次に現在のマイスターの種類を手工業マイスターと工業マイスターの大きく二つに分け、それぞれの異なるマイ

スター試験の内容、そしてマイスターの現状と EU 国内におけるマイスターの位置づけを説明する。また、忘れてはいけないのがマイスター制度を支えているといっても過言ではないドイツの教育制度（デュアルシステム）であり、これについても少し触れる。第二章では、ドイツのマイスター制度から日本のマイスター（親方）に目を向け、前章同様、日本における徒弟制度の歴史や仕組みに加え、徒弟制度の崩壊を述べる。第三章では、今まで述べてきたドイツのマイスター制度と日本の徒弟制度を比較することで共通点と相違点を浮かび上がらせ、そこからさらにマイスター制度への理解を深める。第四章では、ドイツで見た黒ずくめの若者がマイスター制度の特徴である職人の遍歴途中であることが分かったことから、遍歴とは何かについて述べる。この章ではドイツの新聞に掲載された遍歴途中の職人についての記事を翻訳し、実際の遍歴の実態について説明する。続いて遍歴が始まった時代背景と始まった原因であると考えられているいくつかの説を紹介し、その中で有力とされているペストによる遍歴の始まりについて追及する。最後の章では現在の「日本ードイツ」職人の交流活動を行っているカール・デュイスベルク協会を紹介し、職業研修分野や外国人がドイツで働くということの現状を述べる。最後に今まで論じてきたものをまとめて論文を締めくくる。

## 2. 竹之友 希

### 外国人のためのスイスドイツ語講座

#### — 教科書分析を通して —

「ドイツ人がスイスドイツ語を学ぶ。」何故同じ「ドイツ語」であるのにドイツ人はスイスドイツ語を学ぶ必要があるのだろうかという疑問から、この研究は始まった。

ドイツ語圏スイスは、ダイグロシアという同一言語の二つの変種が並存している珍しい言語状況にあり、標準語として書面上や学校、ニュースなどでは標準ドイツ語が用いられ、日常生活では方言のスイスドイツ語が話されている。ドイツ語とスイスドイツ語の両者は、同じ「ドイツ語」が付いていても、アクセントや発音、語彙、文法など様々な面で大

大きく異なっている。勉強または仕事のためにスイスにきた外国人は、まず方言のスイスドイツ語の壁にぶつかるのである。

本論では、方言であるスイスドイツ語を学ぶ手段の一つとして、スイスドイツ語の講座を持つ語学学校に着目した。まずドイツ語圏スイスの言語状況を述べた後、語学学校のスイスドイツ語講座について詳述し、講座で使用されている教科書を参考にしながら、標準ドイツ語とスイスドイツ語の具体的な違いや教科書の問題点をまとめた。

語学学校に関しては、チューリヒ地方の方言に限定し、スイスドイツ語講座を持つ語学学校に対し、コースの規模や受講者の内訳、受講目的、使用している教科書に関して、メールでのアンケート調査を行なった。その結果、授業は少人数制で行なわれ、比較的ドイツ人が多く受講していることがわかった。コースによっては、受講者の半分以上がドイツ人であったり、また、ドイツ人のみのコースも存在しているほどであった。これには、スイス国内でのドイツ人の増加が影響しており、同じ言語圏であることや高い所得が得られるということからスイスに勉強または仕事をしに来たが、日常生活や職場でスイスドイツ語に支障を感じたのが理由と考えられる。実際に多くの語学学校がアンケート調査で、受講者の受講目的は「仕事のため」や「移住のため」と回答した。

教科書分析では、実際に語学学校で使用されている教科書を参考に、名詞に着目して、表記や発音、形態、複数形、定冠詞について分析をした。スイスドイツ語の教科書は、標準ドイツ語が理解できることを前提としており、標準ドイツ語と比較しながら、スイスドイツ語が持つ一定の規則が多く紹介されている。標準ドイツ語と全く同じ名詞や、全く異なる名詞については、単語リストに簡単に紹介されているだけである。しかしこのような規則は語彙の一部にしか当てはまらず、例外も多い。表記や発音に関して言えば、例えば、標準ドイツ語の „ei“ は „ii“ 、 „äi“ 、 „eti (2つの単母音)“ の3つのスイスドイツ語に対応する可能性がある (z.B. Schweiz → Schwiiz, nein → näi, frei → frei [fre-i])。しかし、どの発音に対応するかは前後の音素を見ても、規則性を見出すことは出来ず、標準ドイツ語の „ei“ は „ii“ になる傾向があるという規則を設けると、それ以外の „äi“ 、 „eti“ になる語彙は例外として扱われることになる。教科書内ではそういった記述がされており、単語リストで一つず

つ確認しない限り、学習者はどの語彙が規則通りで、どの語彙が例外に当たるかはわからないのである。またそのような規則や例外の数が多く、受講者のモチベーションを下げうるといふ問題点もある。

また、スイスドイツ語の名詞の特徴として、頻繁に名詞末尾の „-n“ が脱落する傾向が挙げられる。複数形も同様で、N式がなく、代わりにE式やウムラウトで補うため、無語尾式、E式、R式の3つの型だけになる。標準ドイツ語であれば、名詞末尾の „-e“ で性や数が判断できる場合があったが、スイスドイツ語では „-en“ の „n“ が脱落してしまうので、それらが判断しづらく、また、標準ドイツ語と同じ名詞でも、複数形は違う複数形になるのである。

本来、正書法を持たないスイスドイツ語を教科書にすることは難しく、教科書の冒頭部分でも「スイスドイツ語の理解の手助けをする」と述べられ、「手助け」という位置づけがされている。

方言であるスイスドイツ語は、スイス人とのコミュニケーションを図る上で、非常に重要な役割を占めており、メールやチャットなど方言の使用領域も拡大の傾向にある。また、標準ドイツ語に対するネガティブな印象も相まって、スイス人のアイデンティティーでもあるスイスドイツ語で会話することによって、仲間意識が強まるのは確かである。このような言語状況が、方言が広く学ばれる状況を生み出し、スイスドイツ語講座の需要を拡大させているのである。

### 3. 三好 真由佳

#### スイスの言語事情

##### — 多言語体制とスイスにおけるドイツ語 —

スイスは多言語国家である。4つの言語を持つこの国家にはわれわれの単一言語国家では考えられない多くの言語的、文化的、社会的事情がある。本論では、そうしたスイス特有の言語事情をドイツ語圏を中心に、教育やメディア、国民の日常生活等、実際の使用状況を観点に明らかにする。

スイスは何の問題も無く多言語国家を成立させているように思われる。

だが実際、国家が誕生したときから現在に渡りスイスは多くの言語問題を抱えている。スイスではカントンの境界と言語圏の境界線は必ずしも重なっておらず、言語人口が大きく二分、三分されているカントンもある。複数の言語が接触する地域の事情は、特に注目すべきものである。また、規模の違いはあるにせよ、どのカントンにも言語的マイノリティが存在し、そうした言語に対する配慮は国家の重要な課題と言える。第1章ではこのようなスイスの言語問題を各言語圏や言語地域から観察する。それぞれの言語圏、言語地域によって問題はさまざま、ある問題には一応の対策を講じられ、あるものには長きに渡って解決の糸口を見つけられないでいる。

次の第2章ではスイスという多言語国家が現在に至るまでにどのような歴史的過程を経たのかを解説する。その中で次々に言語問題に直面していったのにもかかわらず、なぜ言語の異なる民族が一つの共同体を創り上げたのか。

そして第3章、第4章ではスイスにおけるドイツ語を取り上げる。スイスのドイツ語とは、スイスで話されているスイス標準ドイツ語 (Schweizerhochdeutsch) と、ドイツ語圏スイス特有のドイツ語方言であるスイス・ドイツ語 (Schweizerdeutsch) の両方を指す。

スイス標準ドイツ語とは公的な場で用いられ、いわばドイツ語社会における共通語である。ドイツ語圏スイス人が日常で話している言語はスイス・ドイツ語である。このスイス・ドイツ語という方言はドイツのドイツ語やスイス標準ドイツ語と比べると大きく異なっており、また各地域にそれぞれのスイス・ドイツ語が存在し、ドイツ人でさえ理解に困難を来すほどである。公的なスイス標準ドイツ語と私的なスイス・ドイツ語をめぐる深刻な問題がある。従来、標準ドイツ語が用いられる学校や教会、映画、ラジオなどでスイス・ドイツ語の使用が拡大してきたことである。特に学校ではこの問題は重大であり、ドイツ語圏スイス人がスイス標準ドイツ語が話せないようになってしまうと、国内の他言語圏との意思疎通が難しくなるだけでなく、ドイツ語諸国から孤立してしまうのではないかと懸念されている。

また、メディアにおいては複雑で、ドイツ語圏スイス人が望むスイス・ドイツ語での放送か、あるいは多言語国家スイスや国際社会を意識し標

準ドイツ語での放送か、明確な基準がない中、難題となっている。

スイスは以上のようなさまざまな問題とどのように向き合い、そしてどのように解決の道を探していくのだろうか。